

後朱雀天皇とキサキの文学的営為・文化圏についての一考察

— 女御延子を中心に —

高橋 由記

要旨 平安後期の後朱雀天皇のもとには、東宮時代を含めて五人のキサキがいた。キサキたちが妍を競ったであろう後朱雀朝の文化圏はどのようなものだったのか。後朱雀天皇やキサキたち、中でも、最後に入内した女御延子に注目して調査・考察した。その結果、諸資料から天皇はもちろんのこと、印象薄いと思われる延子の風雅の姿もみてとれた。今回の調査により、後朱雀朝における文化・文学的営為や、延子文化圏の存在感を確認することができた。

はじめに

平安後期の第六十九代後朱雀天皇（寛弘六年（一〇〇九）〜寛徳二年（一一〇四））、在位は長元九年（一一〇三）〜寛徳二年（一一〇四）には、東宮時代を含めて五人のキサキ⁽¹⁾がいた。⁽²⁾キサキが一人しかいなかった後一条朝や表面的には対立のなかった後冷泉朝と比べたとき、頼通政権下において最も多い五人のキサキが存在した後朱雀朝は、後宮文化が華やかだったと想像される。しかし、資料の少なさもあって、それほど研究が進んでいるとはいえない。⁽³⁾小論では、一人の人物を中心として、そこに集う女房や男性貴族たちによる文化的・文学的営為の場を「文化圏」と呼ぶが（その際、規模の大小は問題にしないこととする）、キサキたちが妍を競ったであろう後朱雀朝の文化圏はどのようなものだったのか。歴史物語にはどのように記され、また和歌資料からはどのようなことが分かるのか、考察したい。

I 後朱雀天皇―『栄花物語』にみる人となり・治世・文学的嗜好―

後朱雀天皇は一条天皇の第三皇子（母は中宮彰子）で、一歳年上の同母兄のもと、約二十年という長い東宮時代を経て、二十八歳で即位した。治世は九年だったが、姫子入内・立后による関白頼通と禎子内親王の不和、頼通と天皇の不和、内裏火災などの天災害、崩御前の生子立后問題・次期東宮問題と、院政期の萌芽は後朱雀朝にあったといってもよい。⁽⁴⁾短い治世に諸問題を抱えることになった後朱雀天皇の人となりについて、『栄花物語』は次のように記す。

I、内の御心、いとめでたくあるべかしく、すくすくしうさへありて、制も厳しくなどぞおはしましたける。御かたちいとめでたくおはします。（卷三十 四「暮まつほし」、③二九八頁）⁽⁵⁾

II、内の上は、すくよかにわづらはしき方におぼえさせたまへれど、歌の方にをかしうぞおはしましたける。（同、③三〇七頁）

III、この御時は、制ありて、衣の数は五つ、紅の織物などは制あり。ものの栄えなけれど、をりをり院（＝彰子）の人の装束などはいとをかしくせさせ

たまふ。されど、制あれば、いと口惜しくぞ。(同、③三一五頁)

IV、この御時はさまざま御方々おはします。さるは御心はうるはしく、あだならずおはしましける。殿(Ⅱ頼通)などにも、故院(Ⅱ後一条天皇)はまかせられたてまつらせたまひて、よろづも知らぬやうにて、あてに気高くぞおはしましける。これ(Ⅱ後朱雀天皇)はいとうるはしく、御かたちもいときよげに、才おはしまいて、よき帝におはしましけり。(③三一七頁)

V、後朱雀院をすくよかにおはしますと思ひ申ししに、これ(Ⅱ後三条天皇)

はこよなくまさりたてまつらせたまへり。世人怖ぢ申したる、ことわりなり。(卷三十八「松のしづえ」、③四三四頁)

後朱雀天皇は「すくすくしう」(I)・「すくよか」(Ⅱ・V)・制の厳しさ(I・Ⅲ)等が記されるが、その中で特筆されているのが歌才である(Ⅱ)。実際、後朱雀天皇の和歌関係の資料は比較的多く残っている。

1、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」

十一月、殿上に雪山造らせたまひて、「人々詠め」と仰せられてたまふ、

天地のうけたる年のしるしには降る淡雪も山となるらん(③三二二頁)

年時は不明ながら、殿上の前に雪山を造らせた折、天皇自身が詠んだ歌である。雪が降った際に雪山を造ることは『うつほ物語』『枕草子』『栄花物語』『夜の寝覚』にも見えるから、それほど珍しいことではなかったかもしれないが、後朱雀天皇が風雅を好むことや、それに合わせて人々に詠歌を求めたこと、そして自らも詠んだことがわかる。

2、『金葉集』(三奏本)卷九・雑上・五五六

後朱雀院御時、近江国より白鳥を奉りたりけるを、隠して置かせ給ひたりけるを、女房達ゆかしがり申しければ、「各々歌詠みて奉れ。さよからむ人に見せん」と仰せごとありければ、つかうまつりける

少将内侍

たぐひなくよにおもしろき鳥なればゆかしからずと誰か思はん⁽⁸⁾

白鳥が献上されたときに、それを見たがった女房たちに詠歌を求めたものである。ただ、詞書の「後朱雀院御時」は、二度本(卷九・雑上・五六六)では「後冷泉院御時」となっていて問題は残る。史料では後朱雀朝および後冷泉朝の白鳥献上は確認できないから、『金葉集』三奏本によれば」という限定付きになるが、当該歌からは、後朱雀天皇が珍しいものを手に入れたとき、人々に詠歌を求めたことが知られる。

Ⅱ キサキへの贈歌

次に、後朱雀天皇がキサキに贈った歌を確認する。後朱雀天皇は東宮時も含め、キサキやその関係者への贈歌が比較的多く残る天皇である。

3、『後拾遺集』卷十一・恋一・六〇四「嬉子への贈歌」

東宮とまうしけるととき、故内侍の督のもとにはじめてつかはしける

後朱雀院御製

ほのかにも知らせてしかな春霞かすみのうちに思ふ心を

4、『新千載集』卷十九・哀傷・二二三九「嬉子(関係者)への贈歌」

贈皇后宮のちのわざの夜、おぼしめしやりてよませ給うける

後朱雀院御製

程もなく雲となりぬる君なれど昔の夢の心ちこそすれ

3・4は、一人目のキサキである道長女嬉子(母は倫子)への贈歌と、嬉子没後に詠んだ哀傷歌である。嬉子の入侍は治安元年(一〇二二)だから、3はその頃の、そして4は嬉子が没した万寿二年(一〇二五)に詠まれた歌である。

5、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」「禎子内親王への贈歌」

五月五日、内より皇后宮に、

もろともにかけし菖蒲をひき別れさらにこひちにまどふころかな⁽⁹⁾

宮の御返し、

方々にひき別れつつ菖蒲草あはぬねをやはかけんと思ひし⁽¹⁰⁾

と聞えさせたまへるを、いとあはれと思しめす。(③二九一頁)

三条天皇皇女禎子内親王(母は中宮妍子)は嬉子没後の万寿四年(一〇二七)に東宮に入侍し、天皇が即位するまでの約十年間はただ一人のキサキとして、二皇女一皇子を産んだ。ところが、天皇即位後に関白頼通の養女姫子が入内・立后したことを原因として、長らく参内しなかったことで知られる。さらに、所生の女一宮(良子内親王)が斎宮、女二宮(娟子内親王)が斎院にそれぞれ卜定され、「一所若宮うち遊ばしきこえさせたまひて、ものをのみ思しめしておはします」(③二八九頁)状態だったという。天皇だけでなく、所生の二皇女とも離れ離れの禎子内親王に対して、天皇は贈歌した。天皇の真意や、天皇からの贈歌という行為がどれほど意味あるものだったのかは不明だが、後朱雀天皇は、少なくともキサキへの心遣いは忘れない天皇だったといえよう。

6、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」(姫子(関係者)への贈歌)

七月七日、故中宮の御事を思しめし出でて、若宮(＝祐子内親王)に、
 去年の今日別れし星も逢ひぬめりためしなき身ぞ悲しかりける⁽¹¹⁾

御返し、

秋くれば流れまされど天の河影だに見えぬ人ぞ悲しき(③三〇六頁)
 天皇即位後の長暦元年(一〇三七)に入内・立后した関白頼通養女姫子は、長暦二年(一〇三八)、翌年と相次いで祐子内親王、禊子内親王を産んだが、禊子内親王出産後まもなく没した。『栄花物語』では祐子内親王への贈歌となっているが、他出の『後拾遺集』や『今鏡』では姫子の養父関白頼通への贈歌になっている。

7、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」(生子への贈歌)

まことや、梅壺の御方に、この春、上より、
 春雨の降りしくころは青柳のいと乱れつつ人ぞ恋しき⁽¹²⁾

と申させたまへれば、

青柳のいと乱れたるこのころは一筋にしも思ひよられず
 と聞えさせたまへり。御返し、

青柳の糸はかたがたなびくとも思ひそめてん色は変らず
 また、御返し、

浅緑深くもあらぬ青柳は色変らじといかが頼まん
 と聞えさせたまひけり。(③三〇九頁)

8、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」(生子(関係者)への贈歌)

まことや、「天皇ト生子ガ」二条殿におはしましし時に、鵜の魚を食ひてさぶらひけるを、入道の大納言(＝公任)聞きたまひて、女御殿の御方に、
 鵜の魚を食ひてさぶらひけることなど書きたまひて、

いかでかはうはの空には知りにけんかくめ見ゆるに世にあへりとは
 上渡らせたまひて、御覽じて、

祈りつつゆるぶる網のしるしには飛ぶ鳥さへもかかるとぞ見る

これを聞きたまひて、また大納言ぞ申たまひける。「公任ノ返歌欠」(③三一一頁)

7・8は女御生子に関する歌である。生子は姫子没後の長暦三年(一〇三九)に入内し、寵愛は厚かったといわれる。7は、五人目のキサキ頼宗女延子が入内した長久三年(一〇四二)春に、天皇が生子に贈ったと記されており、8は小二条殿(＝教通の邸)が里内裏だったときのものである。小二条殿が里内裏になったのは長久元年(一〇四〇)十月、生子が小二条殿に入ったのは同年十一月で、公任没(翌年一月一日)以前となると、詠歌期は約二か月に絞られる。公任最晩年の歌である。文化人公任から孫娘生子への贈歌を知り、天皇が返歌したわけだが、公任への返歌は、和歌を好む後朱雀天皇ならではといえよう。その他、後朱雀天皇から彰子への贈歌(『新古今集』卷十八・雑下・一七二七)、道長への贈歌(『続古今集』卷二十・賀・一八七五)も残っており、歌会で人々に詠歌を求めたこと(『金葉集』卷四・冬・二六一)や、観菊をしたこと(『大式三位集』一三三)も和歌資料から知ることができる。後朱雀天皇は、風雅を楽しみ、人々に詠歌を求め、また自らも歌を詠んだ。文化的・文学的営為に深い造詣を持っていたことが、多くの和歌資料によって確認できる。

III キサキたちの文化的・文学的営為

次に、キサキによる文化的営為を確認する。天皇が文化的・文学的営為に積極的ならば、当然、後宮に集うキサキ（そして、キサキを後見する人物）も文化面に力を注ぐことになるからである。

一人目のキサキ嬉子の歌は残っていない。だが、『栄花物語』には「〔東宮ガ〕昼、登花殿に渡らせたまで御覧すれば、御しつらひよりはじめて、よろづにめでたきに、……はかなき御碁、双六、偏つがせたまふなど、もろともにせさせたまふほどの御仲らひ、つくり合はせたるやうにめでたし。」（巻十六「もとのしづく」、②二三三頁）とあり、東宮と似合いの二人であったという。嬉子は道長にとっての末子であり、その入侍に道長や頼通たちの心入れがあったことはいうまでもなく、華やかな後宮生活を送ったと思われる。

二人目のキサキ禎子内親王は、外祖父道長が全面的に後見し入内が執り行われたと『栄花物語』は記す。しかし、道長没後、禎子内親王の立場は不安定になり、後朱雀朝での関白頼通との不和は周知の通りである。とはいえ、禎子内親王は後朱雀天皇との贈答も残しており（前掲）、またそれ以外にも詠歌が残る。⁽¹³⁾ 文学的営為が資料に残っていないわけではない。

三人目のキサキ姫子は、『栄花物語』に「殿（＝頼通）の居立ちせさせたまふことなれば、世の中靡きていとめでたし。」（巻三十四「暮まつほし」、③二八七頁）と記されるように、養父である関白頼通の全面的な後見のもとに入内した。『栄花物語』には、「中宮（＝姫子）には、前裁合、菊合などせさせたまひて、をかしきこと多かり。」（③二九三頁）と記される。前裁合や菊合を催し、そこに上達部や殿上人が集うことは、姫子の後見である頼通の権勢を示すことにつながるが、そうした催しは天皇の嗜好にも合致していたからこそ企画されたのであろう。姫子は入内から二年で、祐子内親王・禊子内親王を産んで没してしまうが、関白頼通の後見のもと、非常に華やかな後宮生活であったと想像

される。なお、姫子自身の詠歌は残っていない。

四人目のキサキ生子は、父教通や祖父公任に幼い頃から将来を嘱望され、後一条天皇への入内も噂されていた。後一条天皇のもとへの入内は叶わず、次代の後朱雀天皇のもとへ入内するが、「年ごろいつしかと思しめしける御事にて、殿（＝教通）、御心を尽させたまへり。」（巻三十四「暮まつほし」、③三〇五頁）と教通が心を尽くした。生子への寵愛は厚かったとされ、後朱雀天皇が生子（や関係者）に贈った歌も多く残っている（前掲）。『栄花物語』には生子の生涯が点描され、母を亡くした十二歳の詠歌をはじめ、公任との贈答、そして『定頼集』にも定頼や定頼室とのやりとりが残る（八八〇九一、一四五・一四六）など、生子は和歌をよくした。さらに、長久二年（一〇四一）には「弘徽殿女御歌合」を主催しており、後朱雀天皇のキサキのうち、文学的事績が最も多く残っているのが生子である。後朱雀天皇の生子への寵愛には、文化的嗜好の合致という側面もあったのではなからうか。

五人目のキサキ延子は、入内から三年弱で後朱雀天皇が崩じたためか、天皇の延子への贈答は残っていない。しかし、後朱雀天皇が崩じた翌年の延子の歌が、『今鏡』に記される。

帥の内の大臣（＝伊周）の御娘の腹に、君達あまたおはしき。後朱雀院の御時、女御にたてまつり給へりし、麗景殿の女御と申すなるべし。帝かくれさせ給ひて後、里にまかりいで給へりけるに、植多おき給へりける萩を、またの年の秋、人の折りて侍りけるを見給ひて、詠み給ひける

こぞよりも色こそ濃けれ萩の花涙の雨のかかる秋には（「藤波の下」、中四〇七頁）⁽¹⁴⁾

当該歌は『後拾遺集』（巻十・哀傷・五八四）にも入集しているから、当時、知られた歌だったのだろう。そのほか、延子は藤原通房室（＝源師房女嬬子）との贈答も残す。

東宮大夫の姫君（＝延子）、この後久しうおとづれきこえさせたまはざりければ、大将殿の上（＝嬬子）、

はかなしと思ひしほどに露の身も消えやしにけん訪ふ人のなき
御返し、

思ひやる心も露と消え返りえもいひやらで嘆かれぞせし『栄花物語』
卷三十五「くものふるまひ」③三二四頁)

これは、頼通男の通房が寛徳元年（一〇四四）に二十歳で没してしまつた後、通房室の夭子が、延子から長く便りのないことを恨んだ歌である。延子の父頼宗と夭子の母尊子は同母兄妹だから、延子と夭子はイトコである。この贈答をみる限り、延子と夭子は以前から交友があつたことになる。貴顕の女性同士の交友の実態を垣間見せる資料であり、興味深い。

以上、後朱雀天皇のキサキとその文学的営為を粗々追つてみた。

東宮時に入侍し、のちの後冷泉天皇を生んだ嬉子、院政期へとつながる後三条天皇の母として知られる陽明門院禎子内親王、頼通の後見のもとに華やかな後宮生活を送つたと思われ、また後冷泉朝における活発な文学活動を残す祐子内親王・禊子内親王を生んだ中宮嫺子、天皇の寵が厚かつたにも拘わらず立后できなかった悲劇のヒロインとして『栄花物語』に記される生子、最後に入内した延子という五人のキサキを考えたとき、天皇との関わりや後宮生活、あるいは後代への影響において、最も印象薄いのが延子ではなからうか。延子は後宮生活も短いことや、天皇よりも長命だった（≡天皇が哀傷歌を詠むことがない）ことも考慮しなければならぬといえ、他の四人に比して延子の存在感は大きいとはいえない。そこで以下、延子について考察したい。

IV 女御延子 —実父頼宗・養母脩子内親王—

延子の実父藤原頼宗は、異母兄頼通との仲も比較的良好で、「頼通的世界」とよばれる文化世界を実作においても支えた。¹⁵ 延子入内は「つぎの年の弥生のころ、堀河右大臣（≡頼宗）、その時東宮大夫と申ししに、女御たてまつり給ひき。帥の内の大臣（≡伊周）のむすめの御腹なり。大臣たちにも劣り給は

ず、いとめでたく侍りき。」（『今鏡』「すべらきの上」、上二〇頁）と記され、大臣の娘にも引けを取らなかつたという。実際、多くはない資料からは、延子の風雅な様子を垣間見ることできる。

延子は頼宗二女（母は伊周女）として長和五年（一〇一六）に誕生したが、幼い頃から脩子内親王に養われたという。『栄花物語』には、次のようにある。

A、宮（≡脩子内親王）は、東宮大夫殿（≡頼宗）の中姫君（≡延子）、a まだ幼くおはせしをりより、とりはなち養ひたてまつらせたまひける…… b

一条院よろづにしたてまつらせたまへりし何の御調度ども、みなこの姫君（≡延子）の御料にと取りをさめさせたまふ。（卷二十一「後くゐの大將」、②三九六頁）

『栄花物語』は延子が脩子内親王の養女となつた時期を明示しないが（傍線部 a）、倉田実氏は、『小右記』寛仁四年（一〇二〇）十一月二十五日条に「民部大輔（源）方理来伝一品宮（脩子内親王）御消息云、明後日聊有所宮、可参入者、令申臨期無障者可参之由、或云、以左衛門督頼宗女（藤原延子）為彼宮養子被着袴云々」¹⁶と、実資に対し二十七日に予定されている延子（五歳）の着袴の儀への出席要請があつたことから、「着袴以前に養女の話が起り、着袴で正式の養女になつたことを示している。」¹⁷とする。脩子内親王が延子を養女にした理由について、『栄花物語』は次のように記す。

B、「頼宗ノ」中姫君（≡延子）は前一品宮に、「一所つれづれにておはしませば、迎へたてまつらせたまひて、いみじくかしづきたてまつらせたまひて、

c それも内にと思しめしたれど、……東宮大夫殿の上（≡頼宗室）は、帥殿（≡伊周）の姫君にものしたまへば、一品宮には離れさせたまはぬ御仲にて、姫君をも御子にしたてまつりたまへるなるべし。三条宮におはします。御手めでたく書かせたまふ。琴、琵琶弾く人々さぶらひて、いとをかしく弾き合せ遊ばせたまふ。d この姫君も、箏の琴いとをかしく弾かせたまふ。e 御かたちもいとあてにをかしげにものしたまふ。（卷三十一「殿上の花見」、③一九三頁）

脩子内親王は一条天皇第一皇女（母は中宮定子）で、一品という高貴な内親王である。文化的にも優れた脩子内親王のもとで養育された延子は、音楽の素養を磨き（傍線部d）、一条天皇が脩子内親王のために仕立てた調度の豪華さは想像だ（傍線部b）。一条天皇が脩子内親王のために仕立てた調度の豪華さは想像に難くないが、そうした調度品に囲まれながら、脩子内親王に育てられた延子は、文化的な才を磨いていったであろう。さらに、延子は容姿も優れていたという（傍線部e）。実父頼宗は早くから延子入内を志したというが（傍線部c）、実際に延子が入内したのは、後朱雀朝の長久三年（一〇四二）であった。その三年前、教通が一女生子を入内させるにあたり、関白頼通が不快感を示したことは『春記』に詳しい。延子が入内した頃の『春記』は現存しておらず、延子入内に頼通がどのような態度を取ったのかは不明だが、『春記』長久元年（一〇四〇）八月二十日条には「内府女御可登后位事、頼宗卿娘可入内事等、衆口歎々、左右不可口入、甚無益事也、」⁽¹⁸⁾とあり、延子入内の噂は長久元年からあった。それから二年を経ての延子入内である。頼通との関係も充分考慮した上での入内だったのではなからうか。また、久下裕利氏は、頼宗が彰子に近侍していたことや、彰子の中関白家の人々への配慮から「定子所生一品宮脩子内親王のもとに伊周女腹の延子を養子として送り出し、彰子所生の後朱雀天皇への入内を期すのは、頼宗と彰子の意向との合議とみてまず間違いないであろう。」とする。⁽¹⁹⁾頼通政権下において中関白家の人々やその文化が重視されていたことは和田律子氏も論じており、⁽²⁰⁾中関白家の血を引く延子の入内は頼通や彰子にとつて歓迎すべきことだったといえる。後宮における延子やその女房の様は、『栄花物語』に次のように記される。

C、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」

宣耀殿（＝章子内親王）、麗景殿（＝延子）いと近きほどにて、加賀左衛門、出羽弁など言ひ交す。上の御局よりは、まして向ひにていとをかし。

琵琶、箏の琴弾き合せ、殿上人参りなどしてをかし。③三〇九頁

D、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」

麗景殿の下り上りたまふ女房の衣の音、空薫物の薫など、「章子内親王カラ」近きほどにてをかしう心にくし。薫物の香なんすぐれたりける。……麗景殿の女御上せたまつりたまひて、箏の御琴弾かせたまつりたまひけり。いとあてにをかしき御さまにて、いとをかしう弾かせたまふ。同じものの音なれども、よき人の弾きたまはんにあひてをかしきものになん。
(③三二三頁)

E、『栄花物語』卷三十四「暮まつほし」

麗景殿もをりをりの装束をかしう、細殿にて琴、琵琶弾き合せて、殿上人なども誦じなどして遊ぶ。五日、加賀左衛門、一品宮の出羽に、袂にはいかでかくらん菖蒲草なれたる人の袖ぞゆかしきといひたりければ、出羽弁、

へだてなく知らせやせまし九重のおろかならぬにかくる菖蒲を(③三一五頁)

それほど描写が多いとはいえないが、『栄花物語』では統編の視点人物といえる章子内親王⁽²¹⁾との関わりにおいて、延子描写が見られる。そして延子を記すとき、音楽について記されることが多いのに気づく(B→E)。後述するように、延子女房には音楽に秀でた者も複数にいた。脩子内親王のもとで養育され、脩子内親王の女房を受け継いだ延子ならではのことであろう。

V 延子女房

最後に延子女房を確認したい。文化的・文学的な才を持つ女房を抱えることは、文化圏において非常に重要だからである。延子女房のうち、歌集などに名を残すのは加賀左衛門・五節命婦・尾張である。

延子女房でもっとも名を知られているのは、前掲『栄花物語』に出羽弁との交友が記された加賀左衛門であろう。加賀左衛門は脩子内親王のもとにいたが、延子入内に際して延子女房として宮中に入ったと考えられる。⁽²²⁾『袋草紙』によ

ると、延子の父頼宗は、永承五年（一〇五〇）「祐子内親王家歌合」への加賀左衛門の出詠を強く推挙したというから、頼宗が延子女房のなかで歌人としてもっとも期待したのが加賀左衛門だったと思われる。

加賀左衛門は『後拾遺集』以下の勅撰集に九首入集し、長久二年（一〇四一）「一品宮脩子内親王歌合」（歌合番号一三一）、²³永承五年（一〇五〇）「前麗景殿女御歌合」、そして寛治三年（一〇八九）「四条宮扇歌合」に出詠している。²⁴また、『夫木抄』（巻二十・雑二・八七六八）によると、加賀左衛門には家集もあつたらしい。『栄花物語』に交友が記された出羽弁は、東宮妃章子内親王の女房で、『出羽弁集』も残す歌人である。²⁵延子（後朱雀天皇女御）と、章子内親王（東宮妃）に直接的な利害関係がないからこそ、女房同士の交友であるうが、後宮において他の文化圏と交友を持つこと、しかも歌人として知られる出羽弁と贈答を交わすことは、延子にとっても加賀左衛門にとっても、決して負の評価とはならない。

また、加賀左衛門は広い交友関係を持っていた。諸歌集には、頼宗の孫基長（『後拾遺集』巻一・春上・一二四）、中宮内侍（同・巻十七・雑三・一〇二四、一〇二五）、橘為仲（『新古今集』巻十六・雑上・一四七四、一四七五）、源経房男の実基（同・巻十八・一七九九）、源経信（『経信集』一一四、一一五、一七二、一七三（『新拾遺集』巻十八・雑上・一七一九、一七二〇）、賀茂成助（『国基集』一二四、一二五）、²⁶行尊（『大僧正行尊集』五五く六五）との贈答などがみえる。男性貴族（基長・橘為仲・源実基・源経信）との交友は、女御延子の女房だったからこそであろうし、延子の猶子という行尊²⁷とのやりとりも、延子女房だからこそであろう。中宮内侍との交友も、加賀左衛門が延子女房として宮中にいたことがきっかけで始まったのではなからうか。そうした中、『経信集』にみえる贈答は、これまでみてきた延子文化圏の雰囲気垣間見せる。

・『経信集』一一四、一一五

八月十五夜、加賀左衛門といふ人の、琴弾く人あり、聞けなど申しけ

るにまからざりければ、またの日（本歌可尋）返之

ひとりのみ身にしむことは望月の影を見つぞ忘れかねてし

聞くからに身にしむことは望月の駒引く秋も何にかはせむ

「加賀左衛門といふ人」とあるから、加賀左衛門と源経信が特別親しかったわけではないかもしれないものの、両者の交友を示す歌である。延子とその女房たちが琴などの楽を能くしたことは前述した。加賀左衛門は歌詠みとしての資料が残るが、音楽も好んだらしい。今まで述べてきたように、やはり、延子文化圏の特長として、音楽ということがあげられよう。そうした延子文化圏を代表する女房が五節命婦である。

五節命婦は『後拾遺集』「太山寺本後拾遺集注記」に「入道一品宮女房号次命婦」、また『秦箏相承血脉』（『群書類従』十九輯所収）に「五節命婦（麗景殿女御女房／又号嵯峨命婦）」と記される人物である。『秦箏相承血脉』に名が残るのだから、箏の名手である。脩子内親王女房だったが、延子の入内あるいは脩子内親王没後に延子女房になったのだろう。『散木奇歌集』『十訓抄』に、「琴弾き」として記される。

・『散木奇歌集』一六二〇

西山に五節命婦といふ琴弾きのもとに、人々あまた具しておはしまし
て、道にて常磐を過ぎさせ給ふとて 帥大納言殿（『経信』）

ときははすぎぬいづらかきはは

刑部卿政長の付けずとて、譲られしかば

道すがらまもりさいはひたまふれば

似たような話は、『十訓抄』（十ノ六十一）にも残る。「十月ばかり、月明かりける夜」に、出家して嵯峨に隠棲した五節命婦のもとを、源経信・藤原宗俊（管絃に秀でる）・源政長（音楽家）・院禅（楽僧）・慶禅（管絃）・長慶・楽人三四人、源隆綱・源俊明などが訪れ、雅遊したことを記したもので、

このあるじは、五節命婦にて、麗景殿女御の女房なり。なき教奇者にて、朝夕、琴をさしおくことなかりけり。そのつもりにや、かきならずより、

あはれさきにたちて、涙を落す徳なむありけり。(四五七頁)⁽²⁹⁾

とある。かつて宮中でかなり名を知られた女房だったのだろう。女房が隠棲した地の近くを訪れた男性貴族が詠歌することは他にも例があるから、それほど珍しいことではなかったのかもしれないが、『散木奇歌集』と『十訓抄』は同一時の出来事ではなからうか。その他、五節命婦は『狭衣物語』作者として知られる六条斎院宣旨から贈歌されている(『後拾遺集』巻十八・雑四・一〇九六)。六条斎院禊子内親王家の女房と、延子女房との交友があったということだろう。加賀左衛門との贈答を残す大僧正行尊ともやりとりのあったことが知られる(『大僧正行尊集』二〇二)。

また、『今鏡』の語り手「あやめ」は紫式部に仕えていたというが、「ただ養ひて侍る五節命婦とて侍りし、内わたりの事も語り、世の事もくからず申して、琴のつまならしなどして聞かせ侍るも、齢のぶる心地し侍りし、はやくかくれ侍りて。」(「序」、上三三頁)と、琴弾きだった養い子の五節命婦(故人)から「内わたり」のことも聞いたという。あやめの養い子の五節命婦は、「内わたりの事も語り、世の事もくからず申し」たというのだから、音楽の才はもちろんのこと、宮中のこと・世間のことを知る才長けた人物として設定されている。実在の延子女房の五節命婦の存在感や才能が、あやめの養い子の五節命婦の設定に活かしていると考えられる。⁽³¹⁾

なお、『散木奇歌集』や『十訓抄』に記された、源経信らが五節命婦のもとを訪れた話は、江戸期の『百人一首一夕話』巻六「大納言経信」にも記された(ただし、十一月のこととする)。さらに明治期の月岡芳年の浮世絵『月百姿』には「五節の命婦」(明治二十年(一八八七))として、この場面が描かれている。⁽³²⁾源経信らが五節命婦のもとを訪れた話は、『散木奇歌集』・『十訓抄』・『百人一首一夕話』・『月百姿』と、何百年にもわたって取り上げられた。五節命婦は特に著名というわけではないものの、経信との関わりの中で、時代を超えて名を残したのである。

三人目は尾張である。『後拾遺集』に、作者を「藤原範永朝臣女」とする以

下の一首が入集する。

・『後拾遺集』巻十四・恋四・八一九

離れ離れになり侍りける男に詠める 藤原範永朝臣女

うちはへてくゆるも苦しいかでなほ世に炭窯の煙絶えなん

『後拾遺和歌集新釈』は、『二十一代集本勘物』『尊卑分脈』等を参照し、小式部内侍所生の藤原範永女が、範永の尾張守の任が果てた頃、「尾張」の名で麗景殿女御に出仕したとしても矛盾はない。⁽³³⁾小式部内侍は和泉式部の娘だから、尾張は和泉式部の孫となる。祖母和泉式部―母小式部内侍と、いずれも有名歌人であり、また、父範永も和歌六人党のひとりとして名をはせていた。父方・母方いずれも屈指の歌人である尾張を、女房として抱えた延子(あるいは、延子の父頼宗)の、歌に対する高い意識をみてとれよう。

おわりに

以上、後朱雀天皇やキサキの文学的営為について、キサキの中では女御延子を中心に調査・考察をした。後朱雀天皇は和歌を好み、折に応じて人々に和歌を求め、また自身も詠歌した。キサキやその関係者への歌が残るなど、『栄花物語』や和歌資料からは後朱雀天皇の文化・文学的営為への興味をみる事ができる。天皇が文学に深い興味を示せば、当然、そこに集うキサキや女房も文化・文学への深い造詣が求められる。後朱雀天皇のキサキたちは、文学的にも妍を競ったと思われる。そうした中、最後に入内した延子は、天皇からの贈歌が現存せず、資料の少なさもあってかあまり印象深いとはいえない。しかしながら、延子とその周辺を調査すると、音楽を能くし、東宮妃の文化圏とも交流を持ったことがわかる。女御延子は後朱雀天皇のキサキでもっとも印象薄いかもされないが、そうしたキサキであっても、諸資料からは文化的水準の高さが垣間見える。後朱雀朝の文化の高さ、そして延子の文化圏のかがやきも諸資料からみてとれるのである。

〔注〕

- (1) 小論では、中宮・女御・尚侍など、天皇や東宮の妻の意で「キサキ」の語を使い、立后したキサキとしての「后」と使い分けることにする。
- (2) 嬪子没後に禎子内親王が、嬪子没後に生子と延子が入侍・入内したため、五人のキサキが同時に存在したわけではない。
- (3) 後朱雀朝の文壇については、犬養廉氏「和歌六人党に関する試論——平安朝文壇史の一齣として——」(『国語と国文学』三三—九 一九五六年九月、のち『平安和歌と日記』笠間書院 二〇〇四年に収録)、高重久美氏『和歌六人党とその時代——後朱雀朝歌会を軸として——』(和泉書院 二〇〇五年)などの研究がある。
- (4) 赤木志津子氏「後朱雀天皇考」(『古代文化』三六—一 一九八四年一月)など。
- (5) 『栄花物語』は、山中裕氏・秋山虔氏・池田尚隆氏・福長進氏校注・訳『新編日本古典文学全集 栄花物語』①②③(小学館 一九九五—一九九八年)による。人物は私に注をつけた。傍線は筆者。以下、同。
- (6) 『栄花物語』続編における天皇描写については、上杉和彦氏『栄花物語』続編の天皇たち」(『新編日本古典文学全集三三 月報四四』小学館 一九九八年二月)、中村成里氏『栄花物語』続編における後朱雀院」(『日本文学』五八—一二 二〇〇九年十二月、のち、『平安後期文学の研究——御堂流藤原氏と歴史物語・仮名日記——』早稲田大学出版部 二〇一一年に収録)がある。
- (7) 『続古今集』(巻二十・賀・一八八二)に入集。
- (8) 和歌は、『新編国歌大観』(角川書店 一九八三年—一九九二年)による。私に漢字を当て、句読点などを付した。
- (9) 後朱雀天皇の歌の異伝歌(上の句「菖蒲草かけし袂のねをたえて」)は、『後拾遺集』(巻十三・恋三・七二五)に入集。異伝歌は『今鏡』「すべらぎの上」にも入る。
- (10) 『新古今集』(巻十四・恋四・一二四〇)に入集。
- (11) 『後拾遺集』(巻十五・雑一・八九七)に入集。『今鏡』「すべらぎの上」にも入る。
- (12) 以下、四首の贈答は、『新古今集』(巻十四・恋四・一二五〇—一二五三)に入集。
- (13) 『後拾遺集』(巻十五・雑一・八六一)、『続後撰集』(巻五・秋上・二八四)、『弁乳

母集』四(五は弁乳母の返歌)、『万代集』(巻四・秋上・八六三)

- (14) 『今鏡』は、竹鼻績氏『今鏡』上・中・下(講談社 二〇〇六年)による。人物等、私に注をつけたところもある。
- (15) 藤原頼宗については、久保木哲夫氏「堀河右大臣頼宗とその集」(『山岸徳平先生頌寿中古文学論考』有精堂 一九七二年 所収)に詳しい。拙稿「藤原頼宗について」(『考えるシリーズ②』知の挑発 平安後期 頼通文化世界を考える—成熟の行方—武蔵野書院 二〇一六年)。
- (16) 『小右記』は、『大日本古記録 小右記』(岩波書店 一九八七年)による。
- (17) 倉田実氏「入内した養女たち——『栄花物語』から——」(『大妻女子大学紀要——文系——』三六 二〇〇四年三月、のち『王朝撰関期の養女たち』翰林書房 二〇〇四年に収録)。
- (18) 『春記』は、『増補史料大成 春記』(臨川書店 一九六五年)による。
- (19) 久下裕利氏「頼宗の居る風景——『小右記』の一場面——」(『学苑』八七九、二〇一四年一月)
- (20) 和田律子氏「藤原頼通文化世界における『枕草子』撰取の一樣相——『更級日記』を中心に——」(『古代中世文学論考』二九 新典社 二〇一四年 所収)
- (21) 加藤静子氏「栄花物語続編成立に関する一試論」(『国文学 言語と文芸』七二 一九七〇年九月)、『栄花物語』譚合の巻をめぐって——続編第一部と一品宮皇子周辺(一)——(『国文学 言語と文芸』八六 一九七八年六月)、「栄花物語続編第一部と一品宮皇子周辺(二)——『暮まつほし』と『根あはせ』の巻——」(『国文学 言語と文芸』八七 一九七九年三月)、以上、のち『王朝歴史物語の方法と享受』(竹林舎 二〇一一年)に収録。
- (22) 植村真知子氏「加賀左衛門考」(『古典と民俗』一一 一九七五年十一月)
- (23) 当歌合は『新編国歌大観』に収録されていないので、萩谷朴氏『平安朝歌合大成 増補新訂』(同朋舎出版 一九九五年)による。
- (24) 「一品宮脩子内親王歌合」から「四条宮扇歌合」までおよそ五十年のひらきがあり、同一人物なのかという問題もあるが、この間に催された禎子内親王家歌合にた

びたび名の見える左衛門・左門の歌を、『夫木抄』は作者を加賀左衛門として入れる。延子女房の加賀左衛門の歌合出詠については、なお考察の必要があると考える。

(25) 出羽弁については、久保木哲夫氏「出羽弁に関する二・三の問題」(『玉藻』二四

一九八九年三月)、久保木哲夫氏『新注和歌文学叢書6 出羽弁集新注』(青簡舎

二〇一〇年)「解説」、拙稿「後宮の文化圏における出羽弁」(『考えるシリーズ5

王朝の歌人たちを考える——交遊の空間』武蔵野書院 二〇一三年 所収)

(26) 『国基集』にみえるのは、「加賀左衛門命婦」。『辞典ライブラリー』(古典ライブラリー 二〇一三年)の「加賀左衛門」の項(武田早苗氏執筆)を参考にして、加賀左衛門と加賀左衛門命婦と同一人とみなした。

(27) 『古今著聞集』五二「平等院僧正行尊靈験の事」に「麗景殿女御、僧正を御猶子にして、憐愍の志実子に過たりけり。」(八八頁)とある。なお、『古今著聞集』の本文は、永積安明氏・島田勇雄氏校注『日本古典文学大系 古今著聞集』(岩波書店 一九六六年)による。

(28) 藤本一恵氏『大山寺本 後拾遺和歌集とその研究』(桜楓社 一九七一年)

(29) 『十訓抄』の本文は、浅見和彦氏校注・訳 新編日本古典文学全集『十訓抄』(小学館 一九九七年)による。

(30) たとえば、『公任集』(四〇四〜四一一)、『兼澄集』(四八)は、円融天皇中宮嬪子の女房だった小馬命婦が尼になって隠棲した嵯峨野で公任たちが詠歌した例であり、『四条宮下野集』(九五、九六)は「中納言宣旨といひし人」が住む家を見た大納言藤原実たちが詠歌した例である。

(31) 陶山裕有子氏の博士論文『歴史物語研究—語り・叙述』の要約「第二部第六章 五節の命婦の造型—『古事談』『十訓抄』『秦箏相承血脈』とともに」に、あやめの養い子五節命婦は、延子女房の五節命婦の姿を喚起させるものであったろう、とある(『学習院学術成果リポジトリ』による)。

(32) 岩切友里子氏『芳年『月百姿』』(東京堂出版 二〇一〇年)の解説によると、芳年は他の浮世絵でも『百人一首一夕話』を参照しており、「五節の命婦」図の題材も、『百人一首一夕話』から得た可能性が考えられるという。

(33) 犬養廉氏・平野由紀子氏・いさら会『後拾遺和歌集新釈』(笠間書院 一九九六年)、当該箇所は清水知子氏執筆。